ふるさとの誇り 126

市内に伝わる信玄の和歌百首

晴信

詠百首和歌

早春山

いまも猶雪けながらに　みよしのの　山にやはる(春)の　た(立)ちはじめけむ

早春山／いまも猶　雪けながらに　みよしのの　山にやはる(春)の　た(立)ちはじめけむ

後朝恋

さよころも　なれにし人の　おもかげを　うつしてとめよ　庭の朝露

後朝恋／さよころも(衣)　なれにし人の　おもかげを　うつしてとめよ　庭の朝露

久恋

きみこふる　なみだの数は　さよころも(衣)　かさ(重)ねるすそ(裾)も　けふ(今日)はくち(朽)なん

久恋／きみこふる(君恋)る　なみだの数は　さよころも(衣)　かさ(重)ねるすそ(裾)も　けふ(今日)はくち(朽)なん

武田信玄像（法善寺）

法善寺（加賀美）

戦国時代に武勇を誇った武田信玄。甲府駅南口の銅像や、ここに掲載した木像に代表されるような、無骨な戦国武将というイメージがありますが、実は和歌や漢詩に秀でた文化人でもありました。

市内には、加賀美の法善寺に、信玄の詠んだ百首あまりの和歌が遺されており、彼の文化人としての側面を垣間見ることができます。

信玄の和歌百首（正確には百四首）は、元々は巻物として永禄二年（一五五九）に法善寺に奉納されたもので、署名に「晴信」とあることから、彼が出家して「信玄」となる以前の二十代から三十代の作を集めたものとも云われます。奉納が永禄二年であれば、それはまさに彼が出家して「信玄」となった年であり、彼の人生の節目として奉納されたものなのかもしれません。

その後、その和歌を記した巻物は、火災によって失われてしまいましたが、山梨を代表する地誌である『甲斐国志』の編さんにあたり、文化八年（一八一一）に書き写されたものが残されており、これを基に文政三年（一八二〇）に木版本として刊行されたのが、現在法善寺に遺される版本『武田晴信朝臣百首和歌』です。

納められた歌の中には、四季折々の美しさを詠んだものの他、切ない恋の歌なども納められ、信玄のロマンティックな一面も見ることができます。

信玄のみならず、当時の戦国武将にとって、詩歌は重要な教養とされていましたが、武田家は、和歌で知られた冷泉家をはじめとする、京都の公家との交流も盛んであったことが知られ、信玄の文才を評価する記録も残されています。信玄の父信虎も詩歌をしましたが、特に母方の祖父に当たり、当時南アルプス市域を治めていた大井信達は、和歌の名手として甲斐国内のみならず、京都の公家にまで広く勇名をはせていました。信達の娘であり自身の母である、いわゆる大井夫人を通じて、その血脈は信玄に引き継がれたのかもしれません。

これらの和歌が法善寺に奉納された理由は、言うまでもなく法善寺が武田家代々の祈願所として厚く信仰されていたからに他なりません。現在も法善寺には、信玄自筆とされる祈願文などが遺されており、このようなことからも、南アルプス市域と信玄とのつながりを知ることができるのです。

文／写真　文化財課

版本『武田晴信朝臣百首和歌』（法善寺蔵）

古長禅寺（鮎沢）と境内にある大井夫人の歌碑

夢窓国師作とされる庭園で有名な鮎沢の古長禅寺。戦国時代の南アルプス市域に勢力を持ち、和歌の名手として知られた大井信達は、その娘（大井夫人）を武田家に嫁がせ、生まれた子が武田信玄となります。大井夫人は、その晩年をふるさとの地であるこの古長禅寺で過ごしたともいわれ、境内には大井夫人の墓のほか、 辞世の歌とも伝わる「春は花／秋はもみじの／色いろも／日かずつもりて／ちらばそのまま」の歌碑も建てられています。

右に百首和歌の冒頭を飾る一首と、恋の歌二首を掲載しました。他の歌も知りたいという方は、以下の書籍などが刊行され、様々な解釈もなされています。一度お読みになってみてはいかがでしょうか？

筒井義明・小島勇（解説）『武田晴信朝臣百首和歌』
松本憲和『武田晴信朝臣百首和歌全釈
―信玄公の初恋―』

これらの本は、市立図書館でも借りることができます。